

世界記録への挑戦はギネスに申請を認めてもらわなければ前に進むことができない。熱のこもったメールで説得を続けた結果、中村さんたちは晴れて狭き門を突破し、新たに作られた《dango》部門にエントリーが承認された。世界一に挑戦する晴れの舞台には、のちに冬のイベントとして定着する「小清水屋台村」を企画した。

そして訪れた2011年2月26日、第1回小清水屋台村に集まった大勢の町民が見守るなか、縦2・55m、横1・25m、厚さ3cm、重さ115・5kgの巨大でんぷんだんごが完成。当日の様子を収録した審査用画像をギネスに送り、見事《世界最大のだんご》の認定証が送られてきたのはそれから3カ月先の話になるが、この出来事が奇跡の物語誕生に大きく駒を進めることになる。ギネスに挑戦の

でんぷんの生産地にせんべい工場建設を決意

でんぷんが足りない。隠すことなく窮状を訴える山口社長の人柄と熱意に、迎えた小清水町農業協同組合の佐藤正昭代表理事組合長は「さすが百年企業を担うだけのパワーを感じた」と第一印象を振り返る。「社長のお話ぶりから利益優先だけではない、義理や人情など人として大切なものを共有できそうな予感がしました」

会談ののち、佐藤組合長はふと思いつき、「閉校が決まっている小学校を見て行きませんか」と提案したという。少子化に伴う小中学校の統廃合は加速化し、ここ小清水町でも2011年度内に小学校5校の閉校が決まっていた。そのうち、佐藤組合長は思い入れがある母校の水上小学校の見学をすすめ、同時に山口社長

アイデアが出てから実行まで、わずか1カ月半のことだった。

北海道から九州へ 深夜ラジオが結んだ 運命の糸

《北海道の小清水町で巨大でんぷんだんごをつくってギネスに挑戦！》

深夜ラジオから流れてきたこのニュースを北海道から遠く離れた九州の地で聴いていた人物がいた。福岡県福岡市に本社を置く総合食品メーカー、株式会社山口油屋福太郎の代表取締役社長山口毅氏である。

(株)山口油屋福太郎(以下、福太郎)は、1909(明治42)年創業の博多を代表する老舗企業。食用油の製造から始まり、1972(昭和47)年には「味のめんたい福太郎」というブランド名で辛子明太子製品の販売を開始した。なかでも辛

とは引き続き、でんぷん供給の話し合いを続けることとなった。

その2カ月後、今度は福太郎側の呼びかけにより林町長と佐藤組合長が福岡本社を訪問した。「食を通じた地域社会への貢献」を掲げ、

飲食ビルや温泉施設などの多角経営で地元を盛り上げる同社の姿勢を目の当たりにした町長たちは、申し分のないパートナーと出会ったという思いを強くした。

6月、再び小清水町を訪ねた山口社長は閉校する5校を視察し、心を決めた。でんぷんを九州に運ぶのではなく、でんぷんが手に入る生産地に加工工場を作る。それも地元の子どもたちが育った小学校を活用して。まちはその意欲にでんぷんの優先供給で応えることとなった。

工場とする小学校は、1万2000坪の広さや上水道の完備、交通量の多

子明太子風味のせんべい「めんべい」は博多みやげとして大ヒット。全国ネットのテレビ番組で紹介されてからは人気・売上ともに倍増し、福岡県内に新設した工場ですらなる増産が計画されていた。

ところが、である。増産を目指した矢先に、原材料のじゃがいもでんぷんが2010(平成22)年の全国的な不作で供給がおぼつかない状態に。福太郎は調達に走り回り、一時は九州産のさつまいもや輸入じゃがいものでんぷんで試作をしたが、「めんべい」本来の味や食感には及ばないと判断し、切り替えを断念した。

このままではでんぷん不足で販売中止を余儀なくされるのか。窮地に立った山口社長が2011年2月末、いつもの習慣で夜通しラジオをかけたながら床に付いているときだった。突然、「巨大でんぷんだんご」という

い斜里国道沿いの立地などを理由に浜小清水にある北陽小学校に決まった。あわせて8000坪の水上小学校の購入も決定し、またひとつ物語が大きく前進したのである。

単語が耳に飛び込んできた。こしみず。初めて聞く町名だった。

世界一のでんぷんだんごを作るくらい余裕があるならば、新たな供給先として契約してもらうことは

できないのか。大きな期待をふくらませた山口社長は翌日すぐに小清水町農業協同組合に連絡を取り、社長自身が当地に向いて話をさせてほしいという約束を取りつけた。

4. ギネス挑戦当日は巨大でんぷんだんごを特注の鉄板ではさみ、上からも炭火で焼き上げた。
5. 小清水町のでんぷん用じゃがいもの作付け面積は約1900ha。日本屈指の生産地帯として知られる。
6. 旧北陽小学校の面影を残したままの福太郎(株)小清水北陽工場。学校自慢の天文台もそのまま残された。

